南島原市文化財調査報告書　第 31 集

内 野 貝 塚（第二分冊）

―市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査―

２０２３

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、市道新田内野線道路改良事業に伴い実施した内野貝塚発掘調査の調査報告書です。

島原半島の南端部には辻貝塚、栴檀（せんだん）貝塚、永瀬貝塚、三軒屋貝塚など複数の貝塚が存在します。内野貝塚もその一つです。

今回の発掘調査では、弥生時代後期を中心とした多数の土器、石器、貝類や獣骨などが出土しました。その成果の一部については、調査報告書の第一分冊として令和３年に刊行したところです。本冊は、調査で検出した貝層の出土遺物と自然科学分析の報告を中心とするものです。

これまで積み重ねられてきた発掘調査の成果によって、島原半島南端部に点在する弥生時代の貝塚は、稲作ではなく漁労を生活の中心に据えた比較的小規模な集落によって形成されたと考えられています。今回の調査成果もそうした従来の見方を補強するものといえるでしょう。

本書が今後の歴史学研究の一助となり、またその成果が一般の方々の埋蔵文化財に対する理解に繋がれば幸いです。

末筆ですが、発掘調査を実施するにあたり、ご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げ、発刊の挨拶といたします。

令和５年３月 31 日

南島原市教育委員会

教育長　松本　弘明

例　　言

1　本書は、全二冊からなる内野貝塚（長崎県南島原市加津佐町丁所在）の発掘調査報告書の第二分冊である。

2　本書の第一分冊は、南島原市文化財調査報告書 23 集として、2021 年 3 月に刊行している。

3　調査経緯、確認調査および本調査の経過、基本層序、遺構、包含層出土遺物については、第一分冊において報告している。

4　発掘調査および第一分冊の作成に係る体制は第一分冊に掲載している。

5　本書の作成に係る整理調査は、令和３～４年度に行っており、調査体制は次のとおりである。

【整理調査】

調査体制	南島原市教育委員会	教 育 長	永田　良二（～令和３年８月）
		教 育 長	松本　弘明（令和３年８月～）
		教育次長	栗田　一政（令和３年度）
			五島　裕一（令和４年度）
	文　化　財　課	課　　長	岡野　博明（令和３年度）
			中村　隆敏（令和４年度）
	文　化　財　班	班　　長	梶原　知治
担当	文化財課文化財班	副参事（学芸員）	伊藤　健司

6　本書掲載の土器の撮影は、伊藤が行った。

7　本書に掲載した土器実測図の作成と製図は、(株) 島田組長崎営業所に委託した。

8　自然科学分析は、(株) 古環境研究所に委託した。

9　本書に関する遺物・図面・写真等は、旧坂下小学校で保管している。

10　本書の執筆・編集は伊藤による。

本　文　目　次

第Ⅲ章　本調査 …… 1
　第５節　Ⅲ´層（貝層）出土遺物 …… 1
第Ⅳ章　自然科学分析 …… 9
　内野貝塚における貝類、動植物遺存体同定 …… 9
第Ⅴ章　総括 …… 21
　第１節　貝類の組成について …… 21
　第２節　総括 …… 22

挿　図　目　次

第 23 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図①(S＝１/３) …… 2
第 24 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図②(S＝１/３) …… 3
第 25 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図③(S＝１/３) …… 4
第 26 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図④(S＝１/３) …… 5
第 27 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図⑤(S＝１/３) …… 6
第 28 図　6A 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類 …… 14
第 29 図　6A 区Ⅲ´層（貝層）出土の動植物遺存 …… 15
第 31 図　6B 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体 …… 15
第 32 図　6C 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類 …… 16
第 33 図　6C 区Ⅲ´層（貝層）出土の動植物遺存体 …… 16
第 34 図　6D 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類 …… 17
第 35 図　6D 区Ⅲ´層（貝層）出土の動植物遺存体 …… 17
第 36 図　6E 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類 …… 18
第 37 図　6E 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体① …… 18
第 38 図　6E 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体② …… 19
第 39 図　6G 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体 …… 19

表　目　次

第 8 表　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品観察表①　…… 7
第 9 表　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品観察表②　…… 8
第 10 表　内野貝塚における動物遺存体および植物遺存体同定結果（1）　…… 10
第 11 表　内野貝塚における動物遺存体および植物遺存体同定結果（2）　…… 11
第 12 表　貝類の組成　…… 21

図　版　目　次

図版 15　内野貝塚の貝類　…… 25
図版 16　内野貝塚の動植物遺存体Ⅰ　…… 26
図版 17　内野貝塚の動植物遺存体Ⅱ　…… 27
図版 18　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品①　…… 28
図版 19　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品②　…… 29
図版 20　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品③　…… 30
図版 21　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品④　…… 31
図版 22　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品⑤　…… 32

第Ⅲ章　本調査

第５節　Ⅲ´層（貝層）出土遺物

（１）弥生時代の土器・土製品（第23図～第27図）

117～120は外面に突帯のある胴部片の資料である。突帯の断面形状は、いずれも三角形である。117は「く」字状口縁で胴の張りが強い甕の胴部であり、胴最大径付近から下方にかけて3条の突帯を有する。118、120はいずれも2条の突帯を有する。119は1条の突帯が確認できる小破片であり、突帯頂部に刻目がある。高坏坏部の屈曲部か。

121～137は口縁を伴う甕の資料である。121～130は「く」字状口縁で、肩の張りが弱く、胴部最大径が口径を下回る傾向の甕である。121は口縁端部が肥厚気味に厚くなり、124・125は先細り気味である。

131～135も「く」字状口縁であり、肩の張りがやや強く、最大径が胴部中位付近になる資料である。131・134・135は口縁の立ち上がりが強く、133はやや外反する口縁を持つ。

136・137は大型の甕であり、器壁が厚く、肩の張りが強い器形になると考えられる。いずれも頸部に断面三角形の突帯を１条有する。136は口縁が強く外反し、137は直線的に口縁が立ち上がり、口唇部を指ナデにより面取りする。

138～143は壺の資料である。138は無頸壺である。口縁は内傾し、丸みのある胴部を持つ。139は直口壺の口縁であり、外面に８本を単位とする櫛描文を２段施す。140は短頸壺である。口縁は短く外反し、胴の張りがやや強い器形である。141は肩部から胴部にかけての資料である。胴部外面に断面三角形の突帯を4条有する。142は口縁部であり、直線的に開いたのち端部が直立する。口唇部は指ナデにより面取りする。143は肩部であり、多条沈線を外面に施す。

144～147は甕の脚部の資料である。146・147は接地部が外側にやや開く器形である。

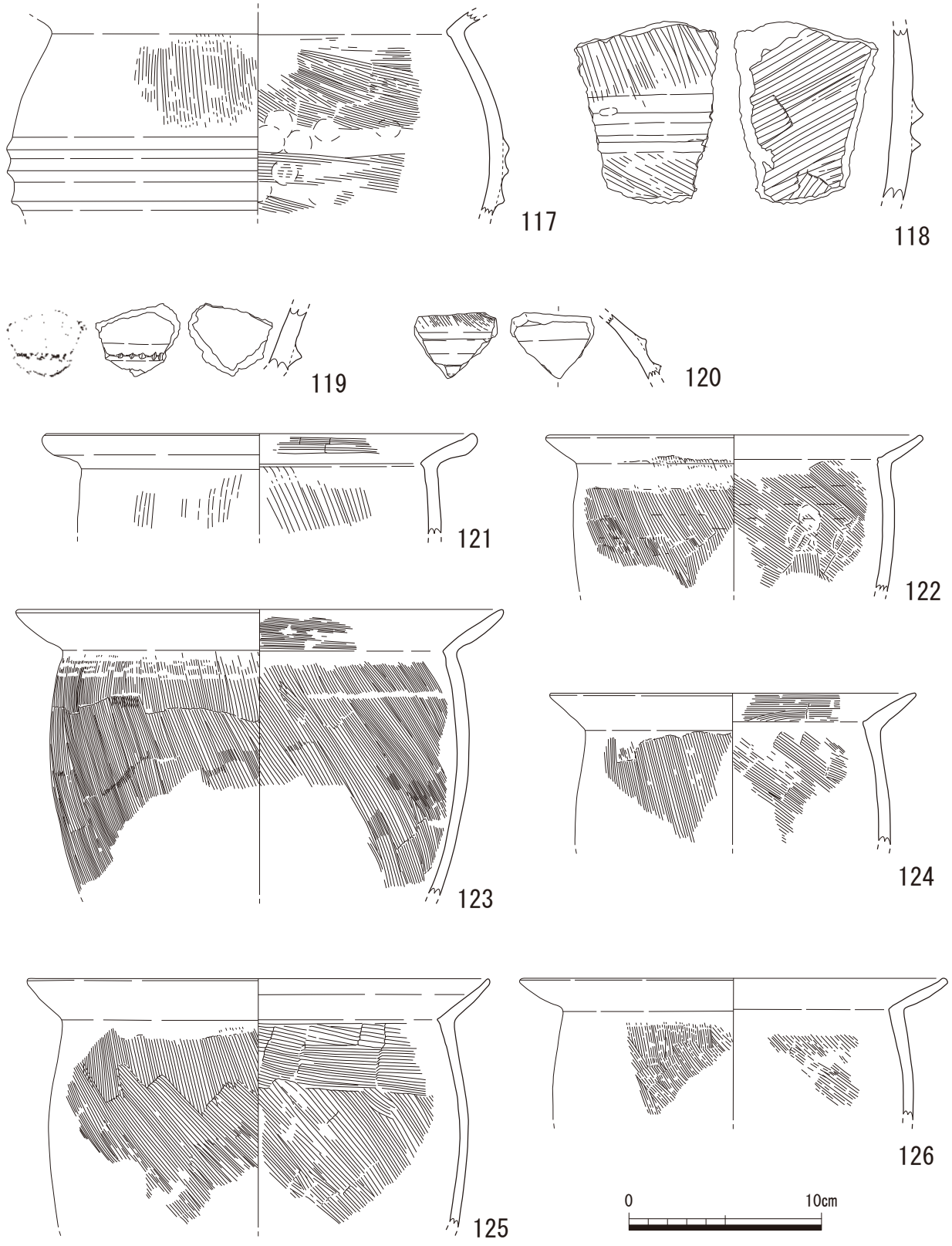
148～155は底部の資料であり、いずれも平底である。149は器壁が厚く、大型品になると考えられる。

156～165は高坏の資料である。156～159は坏部下半から丸みのある立ち上がりである、口縁は大きく開く器形となる。160は外面に凹線状の装飾が3条みられる。161は直線的に開いて上方に立ち上がる坏部の二次口縁である。外面屈曲部に断面三角形の突帯を1条巡らせ、頂部に小さい刻目を施す。162・163は坏と脚の接合部である。164は脚部であり、坏との接合部に円盤充填を行っている。165は脚端部の資料であり、端部に2条の沈線を施す。

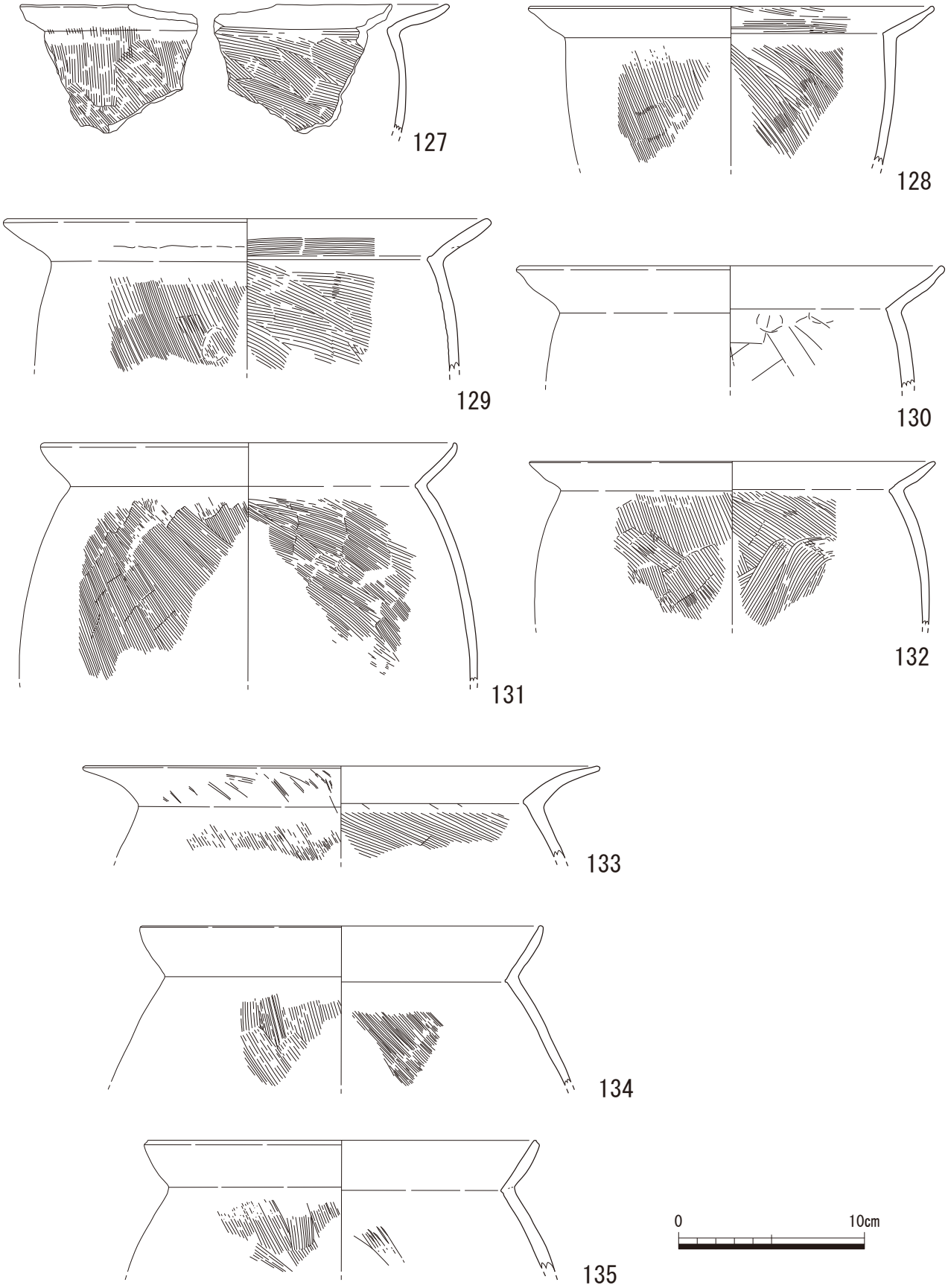
166は器台の資料である。側縁に方形透かしの痕跡が残る。

167～170は鉢の資料である。167は口縁端部が外側に短く開く器形である。168は口縁端部が内湾する。169は丸みのある体部を持ち、口縁はやや内傾する。170は浅型の器形であり、口縁は外側に開く。

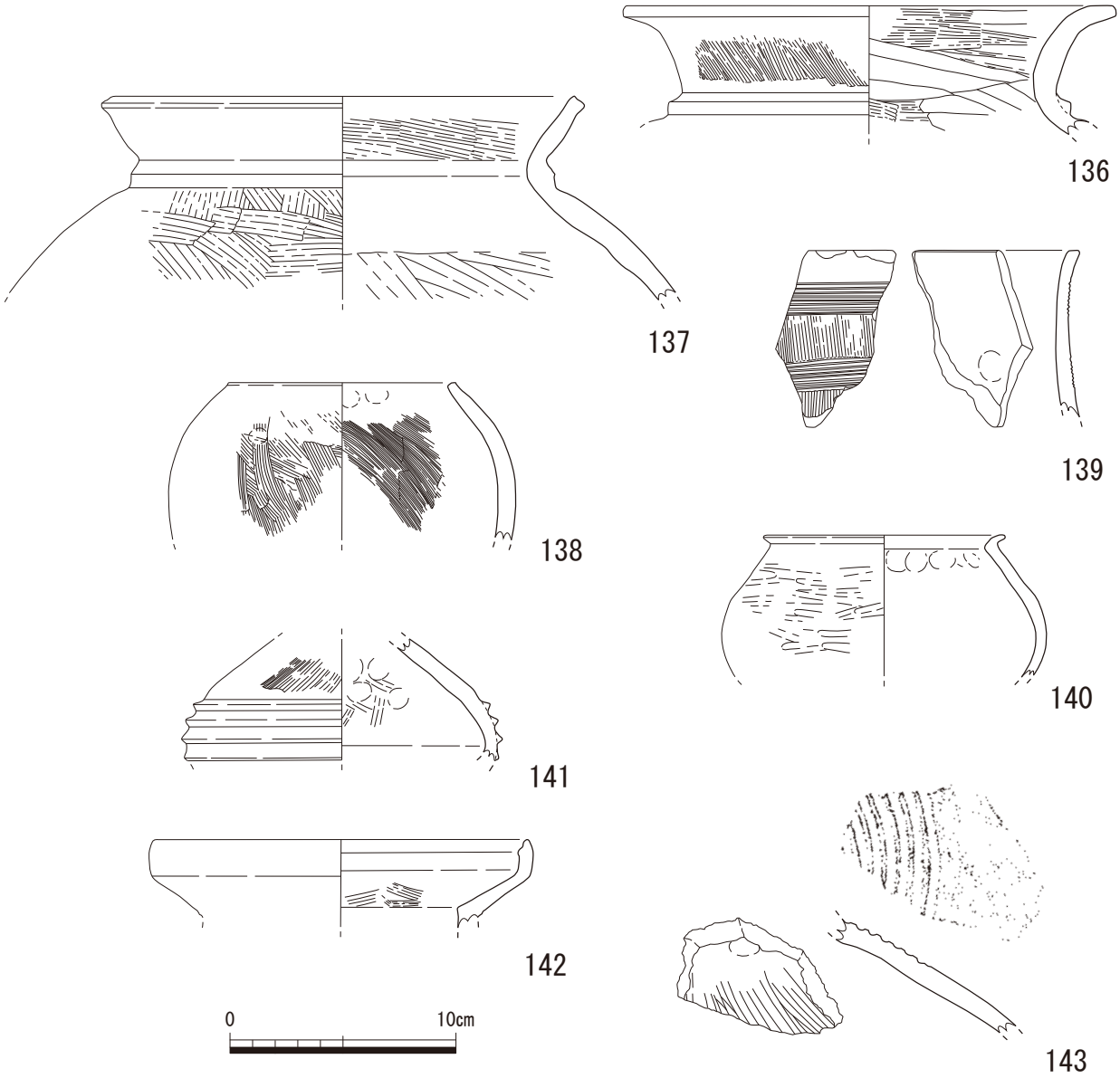
171は円盤状土製品である。土器を打ち欠いてメンコ形に成形したものである。



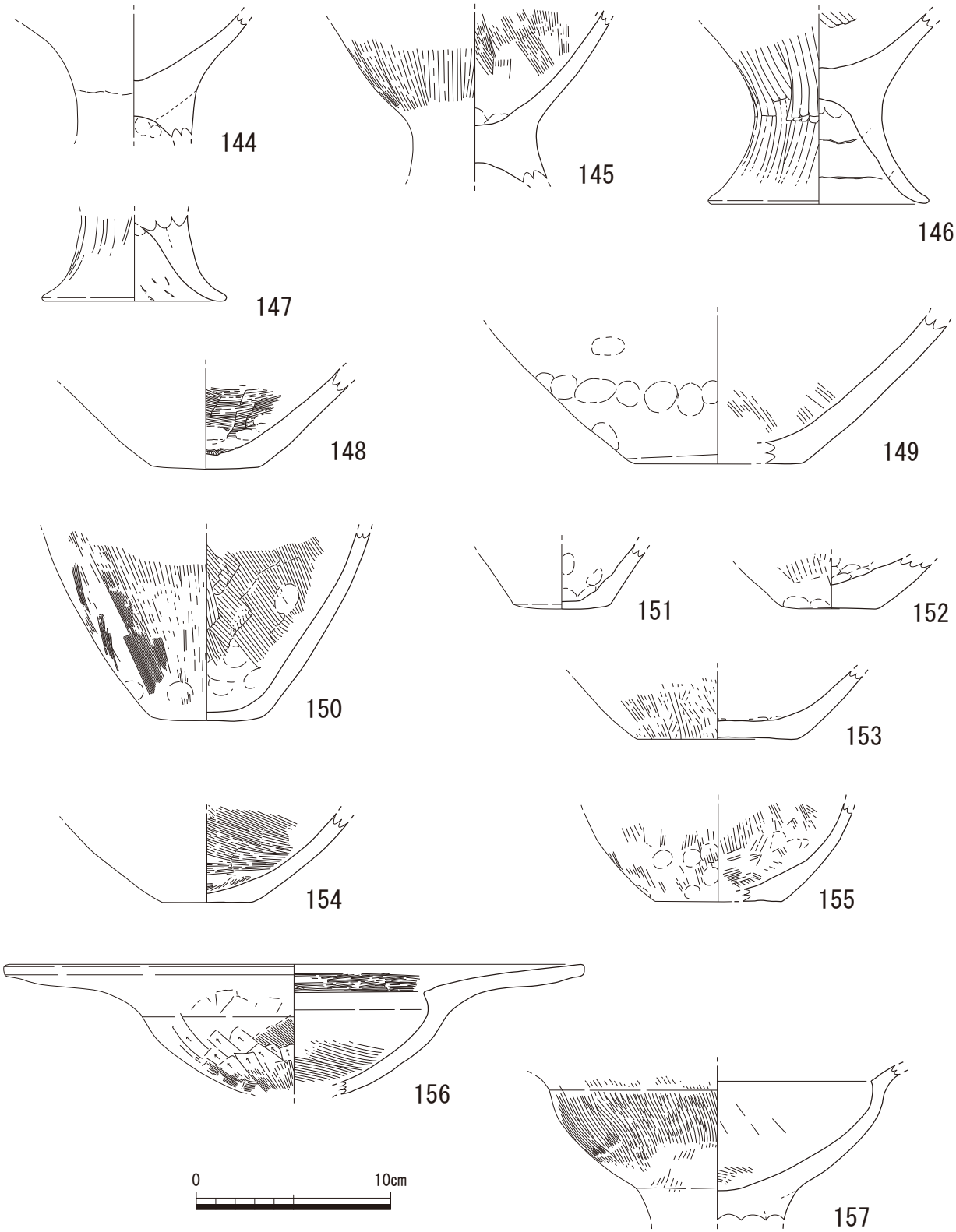
第 23 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図①(S=1/3)



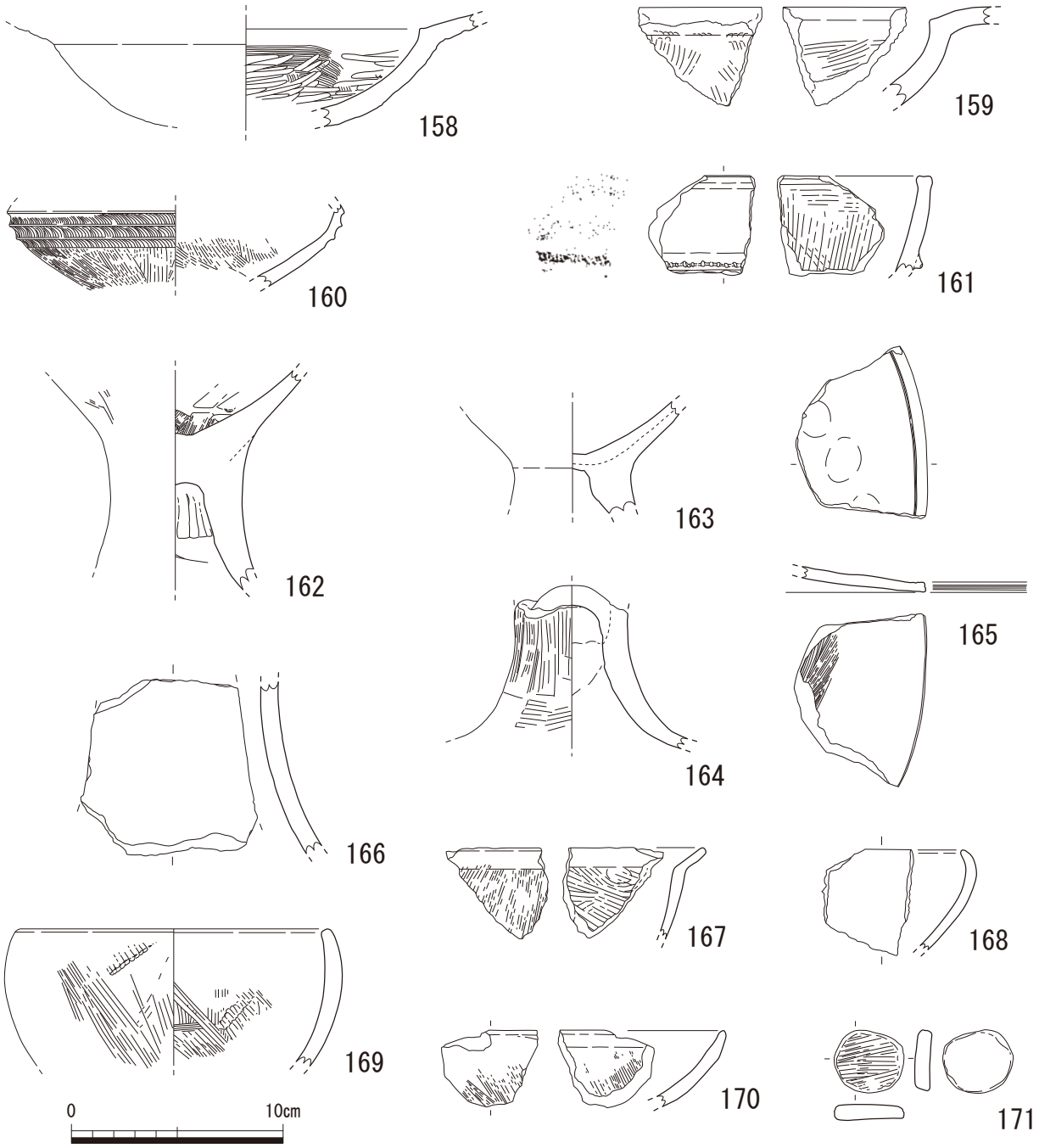
第 24 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図②(S=1/3)



第 25 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図③(S=1/3)



第 26 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図④(S=1/3)



第 27 図　Ⅲ´層（貝層）出土土器実測図⑤(S=1/3)

第8表　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品観察表①

図	番号	器種等	地点	法量			調整		色調		胎土	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面		
23	117	胴部	6A	－	(10.4)	－	ハケ後ヨコナデ ハケ目　指頭痕 ハケ目後ナデ	ヨコナデ　ハケ目(摩滅）貼付突帯	橙色	にぶい橙色	石英　角閃石 赤色粒子	
	118	胴部	6D	－	(8.9)	－	ナナメハケ	タテハケ　ヨコナデ (貼付突帯2条) ナナメハケ	灰白色	淡黄色	長石　角閃石	
	119	胴部	6D	－	(3.2)	－	ナナメハケ後ナデ	ヨコナデ　貼付突帯 ヨコナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 雲母	
	120	胴部	6B	－	(3.1)	－	ナデ	ハケ目　三角突帯	にぶい橙色	にぶい褐色	長石　角閃石 白色粒子	
	121	甕	6D	(22.0)	(5.2)	－	ヨコハケ　ヨコナデ タテハケ	ヨコナデ　タテハケ	黄灰色	にぶい黄橙色	長石　角閃石	
	122	甕	6A	(19.1)	(8.1)	－	ヨコナデ　ハケ目 後指頭痕	ヨコナデ　ハケ後 ヨコナデ　ハケ目	にぶい褐色	灰褐色	石英　角閃石	煤付着
	123	甕	6D	(25.0)	(14.7)	－	ヨコハケ後ナデ ヨコナデ　タテハケ (一部ナデ)	ヨコナデ　タテハケ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	長石　角閃石	
	124	甕	6E	(18.6)	(7.8)	－	ヨコナデ　ヨコナデ 後ハケ目　ハケ目	ヨコナデ　ハケ目	にぶい橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 角閃石 赤色粒子	
	125	甕	6G	(23.6)	(12.8)	－	ヨコナデ　ヨコハケ ナナメハケ	ヨコハケ　ナナメハケ	灰黄褐色	灰黄褐色	石英　長石 角閃石 赤色粒子	
	126	甕	6B	(21.6)	(7.3)	－	ナデ　ヨコナデ ナナメハケ目後ナデ	ナデ　ナナメハケ目	橙色	橙色	石英　長石 角閃石	
24	127	甕	6D	－	(6.8)	－	ヨコナデ ナナメハケ	ヨコナデ　ナナメハケ 後タテハケ	浅黄橙色	赤褐色	長石　角閃石	外面　丹塗り (剥離)
	128	甕	6D	(21.4)	(8.5)	－	ヨコハケ　ヨコナデ タテハケ	ヨコナデ　タテハケ	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	長石　角閃石	
	129	甕	6A	(24.6)	(8.1)	－	ヨコナデ　ハケ目	ヨコナデ　ハケ目	にぶい橙色	にぶい褐色	石英　角閃石	
	130	甕	6A	(22.4)	(6.5)	－	ヨコナデ　工具ナデ	ヨコナデ　ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石	
	131	甕	6E	(22.0)	(12.7)	－	ヨコナデ　ハケ目	ヨコナデ　ハケ目	にぶい橙色～ 黒色	にぶい黄橙色 ～褐色	石英　長石 角閃石　雲母 赤色粒子	
	132	甕	6A	(21.5)	(8.7)	－	ヨコナデ　ハケ目	ヨコナデ　ハケ目	橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石	
	133	甕	6C	(27.2)	(4.9)	－	ヨコナデ　ハケ目 後ヨコナデ	ヨコナデ(工具による (調整)　ハケ目	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石　金雲母 白色粒子 赤色粒子	
	134	甕	6C	(21.2)	(8.5)	－	ヨコナデ　ナデ後 ハケ目	ヨコナデ　ナデ後 ハケ目	橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石 白色粒子 赤色粒子	
	135	甕	6C	(20.4)	(7.0)	－	ヨコナデ　ヘラナデ 後ナデ	ヨコナデ　ナデ後 ハケ目	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　白色粒子 赤色粒子	
25	136	甕	6C	(21.3)	(5.6)	－	ヨコナデ　ハケ後 ヘラナデ	ヨコナデ　ハケ目 貼付突帯	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　長石 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子	
	137	甕	6B	(20.2)	(8.9)	－	ナデ　ハケ目　ナデ ハケ目	ナデ　ハケ目	にぶい橙色	橙色	白色粒子	
	138	無頸壺	6G	(10.0)	(6.9)	－	ヨコナデ後指頭痕 ハケ目	ヨコナデ後指頭痕 ハケ目	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 角閃石 赤色粒子	
	139	直口壺	6E	－	(7.3)	－	ヨコナデ　ナデ後 指頭痕	ヨコナデ　沈線(8条) ハケ目　沈線(8条) ハケ目	にぶい黄橙色	黄灰色	石英　長石 角閃石　雲母 赤色粒子	8条 ×2本の櫛描文
	140	壺	6B	(10.4)	(6.2)	－	ナデ　ナデ後指頭痕	ナデ　ミガキ(摩滅)	橙色	橙色	黒色粒子	
	141	壺	6D	－	(5.3)	－	ハケ後指頭痕後ナデ ヨコナデ	ハケ後ナデ　ヨコナデ (貼付突帯4条)	黄灰色	橙色	長石　角閃石 赤色粒子	
	142	壺	6C	(16.2)	(3.3)	－	ヨコナデ　ナデ後 ヘラナデ	ヨコナデ	橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石 白色粒子 赤色粒子	
	143	壺	6D	－	(5.0)	－	指頭痕後ナデ タテハケ	タテハケ後沈線 ヨコハケ後タテハケ	灰色	にぶい橙色	長石　角閃石 雲母	

第9表　Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品観察表②

図	番号	器種等	地点	法量			調整		色調		胎土	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面		
26	144	甕脚部	6E	－	(6.3)	－	ナデ　指頭痕	ナデ(摩滅)	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色 一部黒褐色	石英　長石 角閃石 赤色粒子	
	145	甕脚部	6C	－	(8.6)	－	ナデ後ハケ目　ナデ 指頭痕　ナデ	ナデ後ハケ目(磨滅) ナデ(磨滅)	褐灰色	にぶい橙色	角閃石　長石 石英　白色粒子 赤色粒子	煤付着
	146	甕脚部	6D	－	(9.7)	(10.9)	ハケ後丁寧な工具ナデ 指頭痕　ヨコナデ	タテハケ(摩滅) ヨコナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	長石　角閃石 雲母	内面に接合痕
	147	甕脚部	6D	－	(4.4)	(9.1)	指頭痕　ナデ　ヨコ ナデ(ケゼリ？)	タテハケ後 ヨコナデ(摩滅)	にぶい橙色	にぶい橙色	長石　角閃石 雲母	
	148	底部	6B	－	(5.1)	(5.3)	ナデ　ハケナデ 指頭痕	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 角閃石 白色粒子 赤色粒子	
	149	底部	6D	－	(7.6)	(8.4)	タテハケ(磨滅)	指頭痕後ナデ　ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 角閃石	外面に黒斑
	150	底部	6C	－	(9.6)	(5.6)	ハケ目後指頭痕	ハケ目後指頭痕 ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色 一部黒色	石英　長石 角閃石 赤色粒子	
	151	底部	6C	－	(3.3)	(4.9)	ナデ後指頭痕	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石 白色粒子 赤色粒子	
	152	底部	6B	－	(2.6)	(4.8)	ナデ後指頭痕	ハケ後ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	石英　角閃石 金雲母 赤色粒子	
	153	底部	6A	－	(3.5)	(8.2)	ナデ　ナデ後指頭痕	ハケ目後ナデ(摩滅) ナデ	橙色	橙色	石英　金雲母 白色粒子	
	154	底部	6C	－	(4.5)	(4.5)	ナデ後ハケ目	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石 白色粒子 赤色粒子	
	155	底部	6F	－	(5.0)	(6.4)	多方向のハケ目後 ナデ	ハケ目後ナデ(一部 指頭痕)　工具ナデ 後ナデ	にぶい黄橙色 一部黒色	黒褐色	石英　長石 角閃石 赤色粒子	内面に一部煤 外面に黒斑あり
	156	高坏	6A	(29.2)	(6.6)	－	ナデ後ミガキ ヨコナデ　ハケ目	ヨコナデ　ハケ後 板状工具ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	長石　角閃石 赤色粒子	
	157	高坏	6D	－	(7.9)	－	ナデ　ハケ	ハケ目	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　角閃石 赤色粒子	黒斑あり
27	158	高坏	6C	－	(5.4)	－	ヨコナデ　ハケ後 粗いミガキ	(剥離)	にぶい橙色	にぶい橙色	角閃石　長石 石英　白色粒子 赤色粒子	
	159	高坏	6B	－	(4.6)	－	回転方向のナデ ヨコ方向のハケ目 ナデ	回転方向のナデ タテ方向のハケ目	にぶい橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石	
	160	高坏	6B	(15.4)	(3.8)	－	ナデ　ハケ目	ナデ　ハケ目	橙色	橙色	角閃石	
	161	高坏	6B	－	(4.5)	－	ハケ後ナデ　ハケ目	ヨコナデ　刻み目突帯	にぶい赤褐色 にぶい褐色	にぶい黄橙色	石英　角閃石	
	162	高坏	6D	－	(10.3)	－	ハケ後ナデ　ナデ 工具ナデ　ヨコナデ	タテハケ後ナデ？ (摩滅)　ミガキ？	灰褐色	にぶい橙色	長石　角閃石 赤色粒子	
	163	高坏	6B	－	(5.2)	－	ナデ　指圧痕　粗い ナデ	ヨコ方向のナデ　ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色	にぶい橙色～ 灰褐色	石英　長石 角閃石 白色粒子	頸部径5.7㎝
	164	高坏	6A	－	(7.6)	－	ナデ	タテハケ目　ヨコナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 角閃石	円盤充填
	165	高坏	6B	－	(1.2)	－	ナデ　ハケ目	沈線文　ナデ 指頭痕後ナデ	にぶい橙色	橙色	長石　角閃石	
	166	器台	6A	－	(8.0)	－	工具ナデ後ナデ	工具ナデ後ナデ	橙色	にぶい橙色	石英　長石 角閃石	方形透かし
	167	鉢	6A	－	(4.3)	－	ナデ　ハケ目後指痕 ハケ目	ナデ　ハケ目(摩滅)	にぶい褐色	にぶい褐色	石英　長石 角閃石	
	168	鉢	6A	－	(4.7)	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい赤褐色	黒褐色	角閃石　雲母	
	169	鉢	6D	(14.4)	(6.4)	－	ヨコナデ　ヨコハケ後 ナナメハケ	ヨコナデ　タテハケ後 ナデ	にぶい橙色	暗灰色	長石　角閃石	外面に黒斑
	170	鉢	6B	－	(3.5)	－	ナデ　ハケ目後 ナデ	ナデ　ハケ目後 ナデ	橙色	にぶい橙色	角閃石	
	171	円盤状 土製品	6B	長径 (3.3)㎝	短径 (3.0)㎝	厚さ (0.8)㎝	ハケ目	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英　長石 角閃石 白色粒子	重さ8.9g

第Ⅳ章　自然科学分析

内野貝塚における貝類、動植物遺存体同定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

一般に日本の国土は、火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、高温多湿というモンスーン気候ともあいまって動物遺存体の保存状態には恵まれていない。そのため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物や植物性の遺物は分解されて残っておらず、遺跡で動物遺存体が出土するのは、おもに貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などであった。しかし、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体の出土例が報告されつつある。

出土した動物遺存体を同定することで、過去の人々の生業や食生活に関する情報を得ることができる。特に大部分が無機塩類（おもに炭酸カルシウム）からなる貝殻をもつ貝類は腐食に強く、土中でも残りやすい。そこで、貝類の同定から、その生息域などの生態的情報を援用して、当時の水環境の復原や種によっては水深を知ることができる。

本報告では、南島原市加津佐町に所在する内野貝塚の発掘調査で出土した動物遺存体（貝類・骨）と植物遺存体（種実等）の同定を行い、当時の人々の動物利用や食生活について検討する。

２．試料

試料は、6A 貝層、6B 貝層、6C 貝層、6D 貝層、6E 貝層、6G 貝層から出土した動物遺存体（貝類･骨）と植物遺存体である。

３．方法

１）貝類

試料を肉眼、ルーペおよび双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本と対比して同定を行う。

２）獣骨・魚骨等

試料を肉眼、ルーペおよび双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を骨格標本資料と対比して同定を行う。

３）種実等

試料を肉眼、ルーペおよび双眼生物顕微鏡下（１～ 100 倍）で観察し、現生標本と対比して属･亜属･種レベルで同定を行う。

４．結果

結果を第 10 表、第 11 表に示し、主要な分類群の写真を図版 15 ～ 17 に示す。以下に、同定結果を層位別に記載する。

第 10 表　内野貝塚における動物遺存体および植物遺存体同定結果（1）

貝層	結果（学名／和名）		部位	部分	左右	個数	備考		写真 No.
6A	Turbo cornutus	サザエ		略完		1	穿孔		1
	Turbo cornutus	サザエ	蓋	略完		1			2
	Omphalius rusticus	コシダカガンガラ		略完		1			3
	Omphalius pfeifferi carpenteri	オオコシダカガンガラ		略完		1			4
	Scapharca troscheli	ヒメアカガイ		略完	左	1			5
	Crassostrea gigas	マガキ		略完	右	1			6
	Crassostrea gigas	マガキ		略完	左	1			7
	Corbiculidae	シジミ科		略完	左	1			8
	Bivalvia	斧足綱		破片	左	1			9
	Osteichthyes	硬骨魚綱	棘状突起	破片		1			10
	Osteichthyes	硬骨魚綱	血管棘	破片		1			11
	Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨	尾椎		2			12
	Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		1			13
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	上顎 M3	右	1			14
	Sus scrofa	イノシシ	上腕骨	近位 - 遠位端	左	1			15
	Sus scrofa	イノシシ	指骨	中節骨近位		1			16
	Cervus nippon	ニホンジカ	手根骨	中間手根骨	左	1			17
	Mammalia	小型哺乳類	寛骨？	破片		1			18
	Mammalia	哺乳類	不明	破片		1			19
	Quercus	コナラ属	炭化子葉	破片		2	同一個体		20
6B	Turbo cornutus	サザエ		略完		1			1
	Chlorostoma xanthostigma	クマノコガイ		略完		1			2
	Batilariidae	ウミニナ科		略完		1			3
	Gastropoda	腹足綱	棘	破片		2			4
	Meretrix lusoria	ハマグリ		完形	右	1			5
	Shell	貝類		破片		1			6
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	下顎 P2	左	1			7
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	切歯破片		1			8
	Cervus nippon	ニホンジカ	遊離歯	上顎 M2orM3	右	1			9
	Cervus nippon	ニホンジカ	遊離歯	完形		1	未萌芽		10
	Cervus nippon	ニホンジカ	鹿角	破片		1			11
	Cervus nippon	ニホンジカ	椎骨	頸椎		1			12
	Mammalia	哺乳類	頭蓋骨？	破片		1			13
	Mammalia	哺乳類	椎骨	椎体		2	若獣		14
	Mammalia	哺乳類	肋骨	近位端		1	イヌか？		15
	Mammalia	哺乳類	肋骨	破片		1			16
	Mammalia	哺乳類	不明	破片		2	噛み痕 1		17
6C	Thais bronni	レイシガイ		略完		1			1
	Gastropoda	腹足綱	棘	破片		2			2
	Crassostrea gigas	マガキ		略完	右	1			3
	Osteichthyes	硬骨魚綱	棘状突起	破片		1			4
	Osteichthyes	硬骨魚綱	血管棘	破片		1			5
	Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		2			6
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	切歯		1			7
	Sus scrofa	イノシシ	手根骨	橈側手根骨	右	1			8
	Cervus nippon	ニホンジカ	遊離歯	下顎 M3	右	1			9
	Cervus nippon	ニホンジカ	遊離歯	略完		2			10
	Cervus nippon	ニホンジカ	大腿骨	骨幹	右	1	スパイラル		11
	Sus scrofa / Cervus nippon	イノシシ / ニホンジカ	上腕骨 or 大腿骨	骨頭		1			12
	Mammalia	哺乳類	不明	骨角器		1	尖頭器？		13
	Mammalia	哺乳類	四肢骨	破片		6	被熱白色変化 1		14
	Mammalia	哺乳類	不明	破片		1			15
	Quercus	コナラ属	炭化子葉	破片		3			16
6D	Turbo cornatus coreensis	スガイ		略完		1		石 1 土塊 1	1
	Anadara broughtonii	アカガイ		破片	左	1			2
	Ruditapes philippinarum	アサリ		略完	右	1			3
	Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		1			4
	Muridae	ネズミ科	下顎骨	下顎体	右	1			5
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	上顎犬歯	左	1			6
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	下顎 P2	左	1			7
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	下顎 P3	左	1			8
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	上顎片	右	1	P2 残存		9
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	上顎片	右	1	P4、M1 残存		10
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	上顎片	左	1	P3、P4 残存		11
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	上顎片	左	1	M2 残存		12
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	上顎片	左	1	M2、M3(未萌芽) 残存、若獣		13
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	破片		4			14
	Sus scrofa	イノシシ	歯槽部	破片		1			15
	Sus scrofa	イノシシ	橈骨	骨幹片	左	1	スパイラル		16
	Sus scrofa	イノシシ	第二中手骨	近位端 - 骨幹	左	1			17
	Sus scrofa	イノシシ	腓骨	遠位端	左	1			18
	Sus scrofa	イノシシ	中心足根骨	略完	左	1			19
	Cervus nippon	ニホンジカ	遊離歯	略完		1			20
	Cervus nippon	ニホンジカ	距骨	略完	右	1	解体痕		21
	Mammalia	哺乳類	寛骨	破片		1			22
	Mammalia	小型哺乳類	橈骨	骨幹		1			23
	Mammalia	哺乳類	四肢骨	破片		3			24
	Mammalia	哺乳類	不明	破片		2			25
	Quercus	コナラ属	炭化子葉	完形		2			26

第 11 表　内野貝塚における動物遺存体および植物遺存体同定結果（2）

貝層	結果（学名／和名）		部位	部分	左右	個数	備考		写真 No.
6E	Hemifusus tuba	テングニシ		略完		1	穿孔	土塊 1 軽石？ 1 蔓性植物片 2 枝 1	1
	Pecten albicans	イタヤガイ		略完	右	1			2
	Pecten albicans	イタヤガイ		破片	左	2	同一個体		3
	Cyclina sinensis	オキシジミ		略完	右	1			4
	Heterodontus japonicus	ネコザメ	遊離歯	完形		1	下顎左か？		5
	Acanthopagrus	クロダイ属	前上顎骨	略完	右	1			6
	Pagrus major	マダイ	前上顎骨	破片	右	1			7
	Pagrus major	マダイ	主上顎骨	近位端	右	1			8
	Pagrus major	マダイ	主上顎骨	破片	右	1			9
	Sparidae	タイ科	角舌骨	破片	左	1			10
	Sparidae	タイ科	尾椎	略完		1			11
	Sparidae	タイ科	椎骨	破片		1			12
	Osteichthyes	硬骨魚綱	上後頭骨	破片	右	1			13
	Osteichthyes	硬骨魚綱	前鰓蓋骨	破片	左	1			14
	Osteichthyes	硬骨魚綱	鰓蓋骨	破片		1			15
	Osteichthyes	硬骨魚綱	棘状突起	破片		5			16
	Osteichthyes	硬骨魚綱	血管棘	破片		1			17
	Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		5			18
	Sus scrofa	イノシシ	遊離歯	上顎犬歯	右	1			19
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	上顎片	右	1	M2 残存、若獣		20
	Sus scrofa	イノシシ	頭蓋骨	破片		1	若獣		21
	Sus scrofa	イノシシ	指骨	中節骨破片		1	若獣		22
	Sus scrofa	イノシシ	腓骨	近位	左	1	若獣		23
	Sus scrofa	イノシシ	第五中足骨	骨幹	左	1	若獣		24
	Sus scrofa ?	イノシシ？	橈骨	近位端	右	1			25
	Mammalia	哺乳類	頭蓋骨	鼻骨破片		2	同一個体		26
	Mammalia	哺乳類	頭蓋骨	破片		3			27
	Mammalia	哺乳類	遊離歯	破片		1			28
	Mammalia	哺乳類	椎骨	椎体		1	若獣		29
	Mammalia	哺乳類	肩甲骨	破片		1			30
	Mammalia	哺乳類	四肢骨	破片		5			31
	Mammalia	哺乳類	不明	破片		3			32
6G	Serranidae	ハタ科？	椎骨	破片		1		土器片 1 鉄分 1 石 1	1
	Sparidae	タイ科	椎骨	破片		1			2
	Osteichthyes	硬骨魚綱	棘状突起	破片		2			3
	Osteichthyes	硬骨魚綱	鰓蓋骨	破片		1			4
	Osteichthyes	硬骨魚綱	鰭	棘鰭		2			5
	Osteichthyes	硬骨魚綱	鰭	尾鰭		2	同一個体		6
	Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		3			7
	Aves	鳥類	四肢骨	破片		1			8
	Sus scrofa	イノシシ	橈骨	遠位	左	1	未融合		9
	Cervus nippon	ニホンジカ	遊離歯	下顎 M3	右	1			10
	Mammalia	哺乳類	肋骨	破片		1			11
	Mammalia	哺乳類	四肢骨	破片		1			12

1）6A貝層（第 10 表・第 28 図・第 29 図）

穿孔のあるサザエ1点、サザエ蓋1点、コシダカガンガラ1点、オオコシダカガンガラ1点、ヒメアカガイ1点、マガキ2点(左右)、シジミ科左1点、斧足綱破片左1点、硬骨魚綱の棘状突起1点、血管棘1点、椎骨尾椎骨2点、不明破片1点、イノシシ遊離歯上顎 M3右1点、上腕骨左1点、指骨中節骨1点、ニホンジカ中間手根骨左1点、小型哺乳類の寛骨？1点、哺乳類の不明破片1点、コナラ属の炭化子葉破片2点が同定された。なお、コナラ属の破片は同一個体である。

2）6B貝層（第 10 表・第 30 図・第 31 図）

サザエ1点、クマノコガイ1点、ウミニナ科1点、腹足綱棘2点、ハマグリ右1点、貝類破片1点、イノシシ遊離歯下顎 P2左1点および切歯破片1点、ニホンジカの鹿角1点、遊離歯上顎 M2orM3右1点および未萌芽の遊離歯1点、椎骨頸椎1点、哺乳類の頭蓋骨？破片1点、椎骨椎体2点、肋骨（イヌか？）1点、肋骨破片1点、不明破片2点が同定された。なお、哺乳類の不明破片の1点にはイヌによると思われる噛み痕があった。

3）6C貝層（第 10 表・第 32 図・第 33 図）

レイシガイ1点、腹足綱棘2点、マガキ右1点、硬骨魚綱の棘状突起1点、血管棘1点、不明破片2点、イノシシの遊離歯切歯1点、橈側手根骨右1点、ニホンジカの遊離歯下顎右（M3）1点、遊離歯

2点、大腿骨右1点、イノシシまたはニホンジカの上腕骨または大腿骨の骨頭1点、哺乳類の四肢骨破片6点、不明破片1点、骨角器(尖頭器？）1点、コナラ属の炭化子葉破片3点が同定された。なお、ニホンジカの大腿骨はスパイラル状に割れており、生の状態で割れたことがわかる。哺乳類の四肢骨には被熱によって白色を呈するものが1点観察された。

4）6D貝層（第 10 表・第 34 図・第 35 図）

スガイ1点、アカガイ左1点、アサリ右1点、硬骨魚綱不明破片1点、ネズミ科の下顎骨下顎体1点、イノシシの遊離歯上顎犬歯左1点、遊離歯下顎 P2左1点、遊離歯上顎 P3左1点、頭蓋骨上顎片右2点、頭蓋骨上顎片左3点、頭蓋骨破片4点、歯槽部破片1点、橈骨左1点、第二中手骨左1点、腓骨左1点、中心足根骨左1点、ニホンジカの遊離歯1点、距骨右1点、哺乳類の寛骨破片1点、哺乳類四肢骨破片3点、不明破片2点、小型哺乳類橈骨1点、コナラ属炭化子葉2点が同定された。なお、イノシシの橈骨はスパイラル状に割れており、生の状態で割れたことがわかる。また、イノシシの頭蓋骨上顎片には歯が残存している。

5）6E貝層 （第 11 表・第 36 図～第 38 図）

穿孔のあるテングニシ1点、イタヤガイ右1点、イタヤガイ左破片2点(同一個体)、オキシジミ右1点、ネコザメの遊離歯1点、クロダイ属の前上顎骨右1点、マダイの前上顎骨右1点、主上顎骨右2点、タイ科の角舌骨右1点、尾椎1点、椎骨1点、硬骨魚綱の上後頭骨右1点、前鰓蓋骨左1点、鰓蓋骨1点、棘状突起5点、血管棘1点、不明破片5点、イノシシの遊離歯上顎犬歯右1点、頭蓋骨上顎片右1点、頭蓋骨破片1点、指骨中節骨破片1点、腓骨左1点、第五中足骨左1点、橈骨右1点、イノシシ？橈骨右1点、哺乳類の頭蓋骨鼻骨破片2点(同一個体)、頭蓋骨破片3点、遊離歯破片1点、椎骨椎体1点、肩甲骨破片1点、四肢骨破片5点、不明破片3点が同定された。イノシシの近位端や遠位端、縫合などが未融合のものが比較的多く観察され、歯が未萌芽のものがあった。

6）6G貝層（第 11 表・第 39 図）

ハタ科？の椎骨1点、タイ科の椎骨1点、硬骨魚綱の棘状突起2点、鰓蓋骨1点、棘鰭2点、尾鰭2点(同一個体)、不明破片3点、鳥類の四肢骨破片1点、イノシシの橈骨1点、ニホンジカ遊離歯下顎 M3右1点、哺乳類の肋骨破片1点、四肢骨破片1点が同定された。

5．考察

内野貝塚で出土した動物遺存体は、サザエ、スガイ、クマノコガイ、コシダカガンガラ、オオコシダカガンガラ、ウミニナ科、レイシガイ、テングニシ、アカガイ、ヒメアカガイ、イタヤガイ、マガキ、シジミ科、アサリ、ハマグリ、オキシジミ、その他の腹足綱と斧足綱の貝類18分類群、ネコザメの軟骨魚綱1分類群類、ハタ科？、クロダイ属、マダイ、タイ科、その他の硬骨魚綱の魚類5分類群、ネズミ科、イノシシ、ニホンジカ、イノシシまたはニホンジカの哺乳類4分類群であった。なお、鳥類の四肢骨の破片が同定されたが細片であるため、鳥類までの同定に留まった。

貝類はいずれも海水生である。レイシガイは潮間帯から潮下帯の岩礁域に生息し、サザエ、スガイ、クマノコガイ、コシダカガンガラ、オオコシダカガンガラは潮間帯にも生息するがより深い水深20～30m程度の岩礁域に生息し、マガキは内湾から河口域の潮間帯から潮下帯の岩礁に生息する。いずれも素潜り漁や刺網などの網漁で漁獲される。ウミニナ科は河口や大きな内湾の干潟・潮間帯の泥底上

に、ヒメアカガイ、シジミ科、アサリ、ハマグリ、オキシジミは内湾の干潟の泥底ないし砂泥底や藻場に生息し、手掘りや小型の底曳網によって漁獲される。アカガイは内海や内湾の深さ5～50mの泥底に生息し、イタヤガイは水深10～100mの砂底に生息し、底曳網などの網漁で漁獲される。いずれも古くから食用とされる貝類であり、またスガイ、レイシガイは地域性の高い食用貝類である。サザエの本体は2点同定されたが、6A貝層で出土した大型のサザエには穿孔があり、また6E貝層のテングニシにも同様の穿孔がある。これらの穿孔は、巻貝の身を取り出すために開けられた穴とみられる。

魚類はいずれも海水生である。ネコザメは沿岸の岩場や藻場に生息し、サザエなどの貝類を捕食していた。食用となるが、『和漢三才図会』に「味は良くない」と記されており、現代では練り物の原料としてのみ食用とされる。また、かつては体皮を研磨材に用いていた。貝類を捕食することから、貝類や他の岩礁域に生息する魚類と共に漁獲されたものと考えられる。ハタ科は沿岸や浅い海の岩礁、サンゴ礁に多く生息し、水深200m以深の深海に生息する種類もおり、食用の種が多い。クロダイ属は岩礁から砂泥底まで見られ、また汽水域にも進入し、内湾性の漁撈を示す代表的な魚種である。マダイは沿岸の岩礁域や周辺の砂礫底に生息する。タイ科としたものにはクロダイ属、マダイも含まれ、内湾から沖合までの浅海の岩礁域や大陸棚周辺の海底付近に生息する。いずれも磯釣り、船釣りなどの釣りや底曳網、刺網などの網漁によって漁獲される。

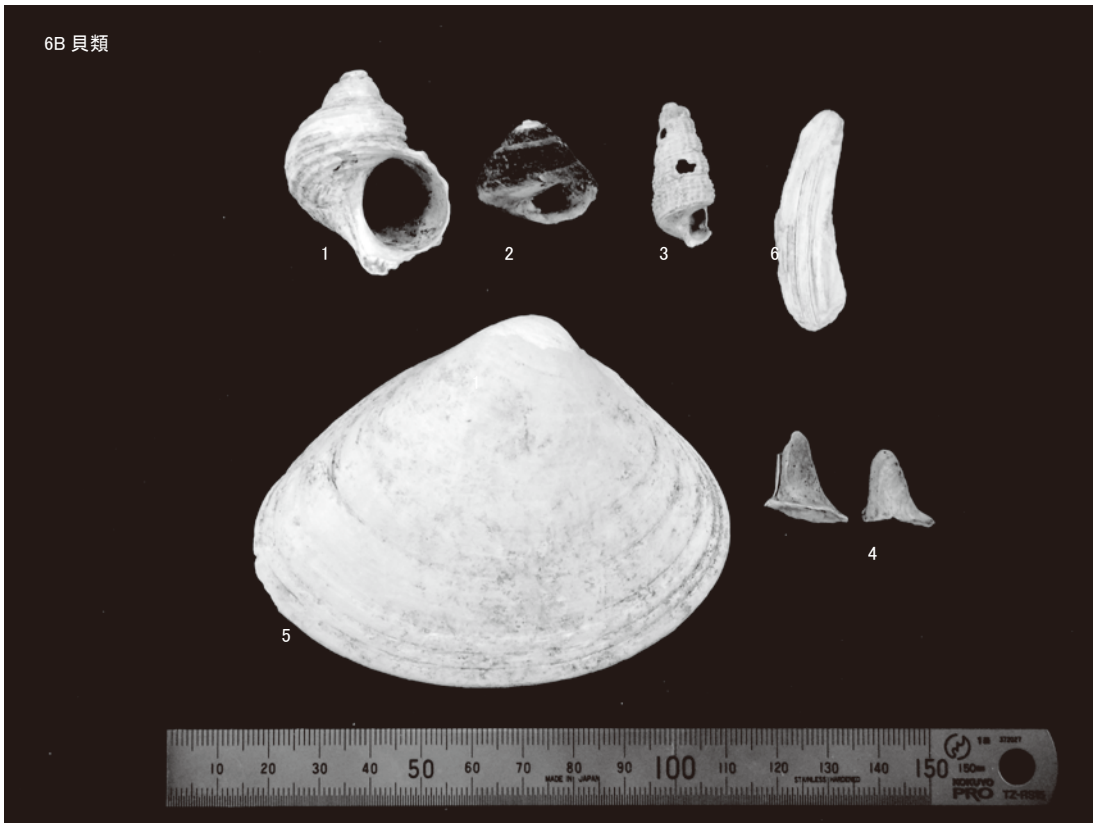
陸生動物はいずれも野生動物である。ネズミ科は河原の土手、草地、河川、海岸などの比較的湿った土地で人間の生活域に近い土地に生息する。食用ともなるが、廃棄された食料の残滓を食べに来た個体が貝塚で死んだと考えられる。イノシシ、ニホンジカは自然豊かな山野に生育する動物である。低山帯から平地にかけて雑草が繁茂する森林から草原に生息し、身を隠せる藪や水場が近い場所を好む。イノシシ、ニホンジカは食用になるだけでなく、いずれも骨や角が骨角器として利用される。なお、イノシシ、ニホンジカのほとんどは歯の咬耗があまり無く、M3が未萌芽のものや、頭蓋骨の縫合や他の関節部が未融合のものが多いことから、比較的若い個体を獲得していることがわかる。幼獣は無く、若い個体がほとんどで成獣も含まれることから、狩猟の対象からは幼獣を除外していたと考えられる。植物遺存体は、いずれもコナラ属の炭化子葉であった。コナラ属は一般にドングリと呼ばれ、コナラ、アカガシ、アラカシなどがある。陽当たりの良い山野に生育し、その種実は渋抜きをすると食用となる。なお、同定された子葉は可食部である。

6．まとめ

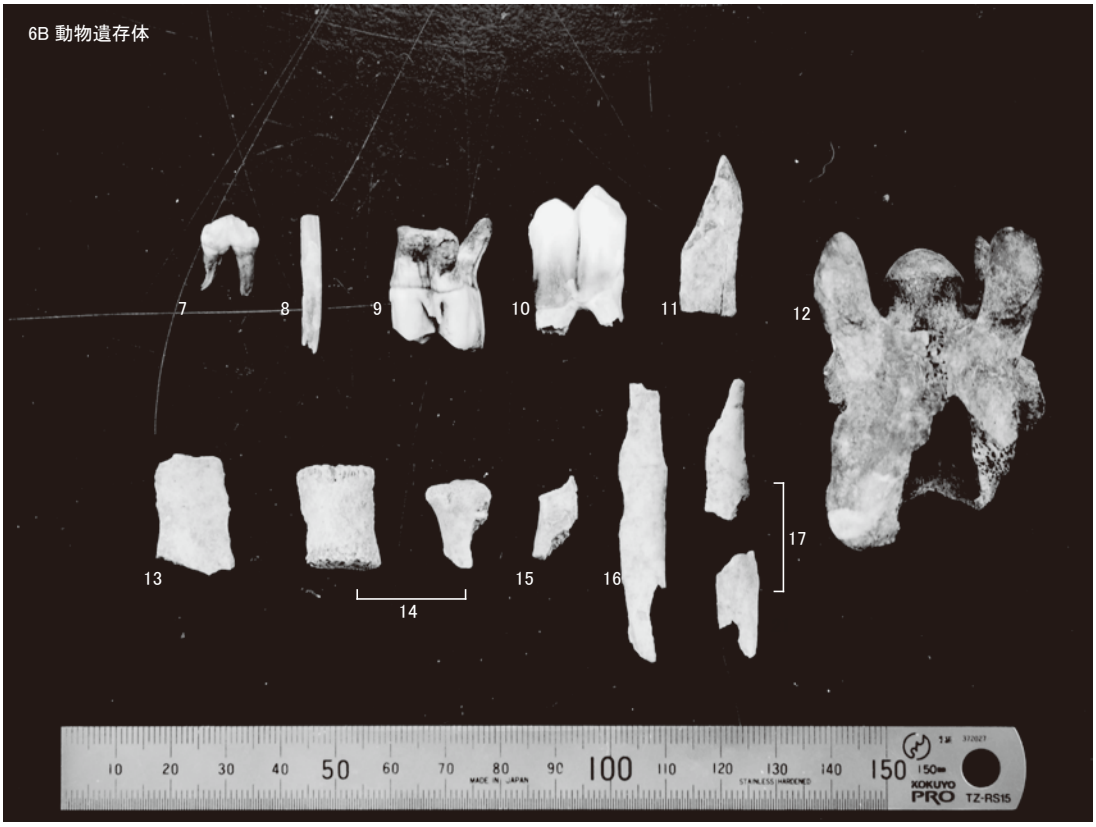
同定された貝類や魚類は内湾性のものがほとんどである。これらは、南島原周辺に分布する内湾の砂泥底混じりの岩礁帯や干潟から、素潜り漁、手掘り、釣り、網漁などによって漁獲されたとみられる。近隣の資源豊かな森林からは、幼獣を除外してイノシシ、ニホンジカが狩猟によって獲得され、コナラ属の種実が採集されていたとみられる。いずれも食用となることから、食用として利用した後にその残渣が投棄されたと考えられる。また、被熱による白色変化は哺乳類の四肢骨片1点のみに見られることから、貝類、魚類は生食された可能性もある。哺乳類は調理前に可食部を切り分けられた後、残滓を貝塚に投棄されと推測される。

第 28 図　6A 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類

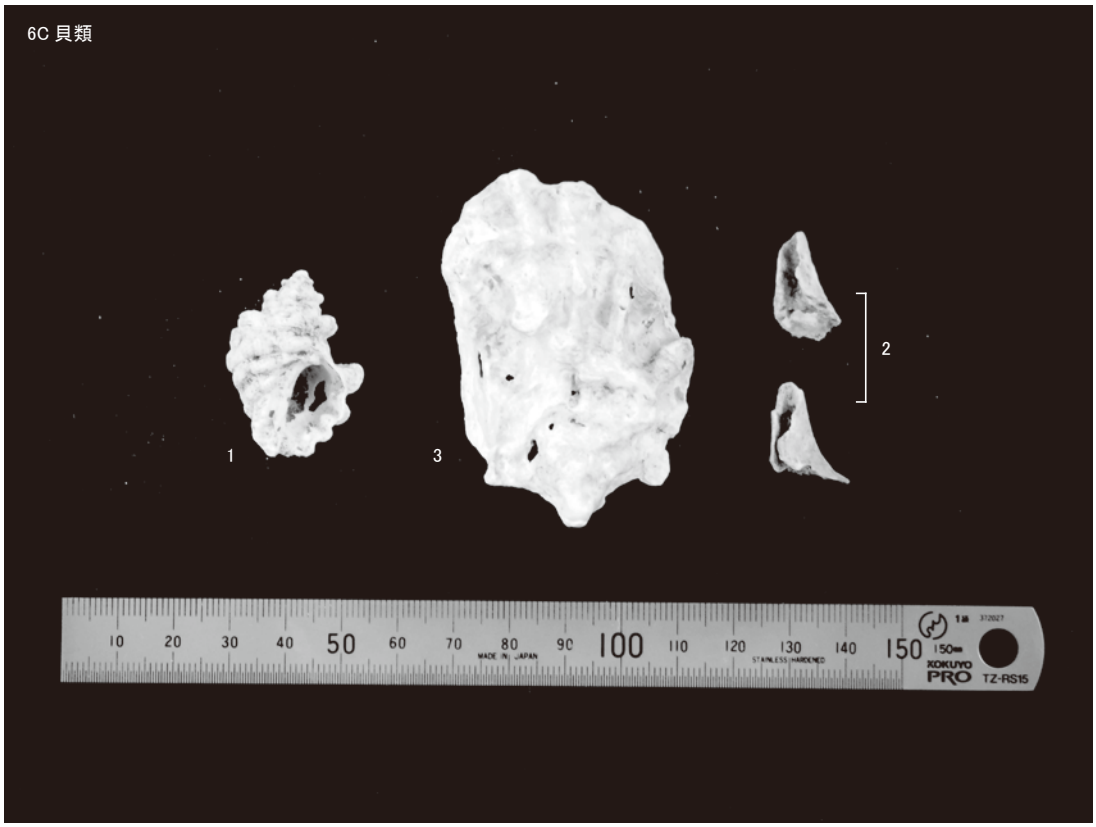
第 29 図　6A 区Ⅲ´層（貝層）出土の動植物遺存体



第 30 図　6B 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類



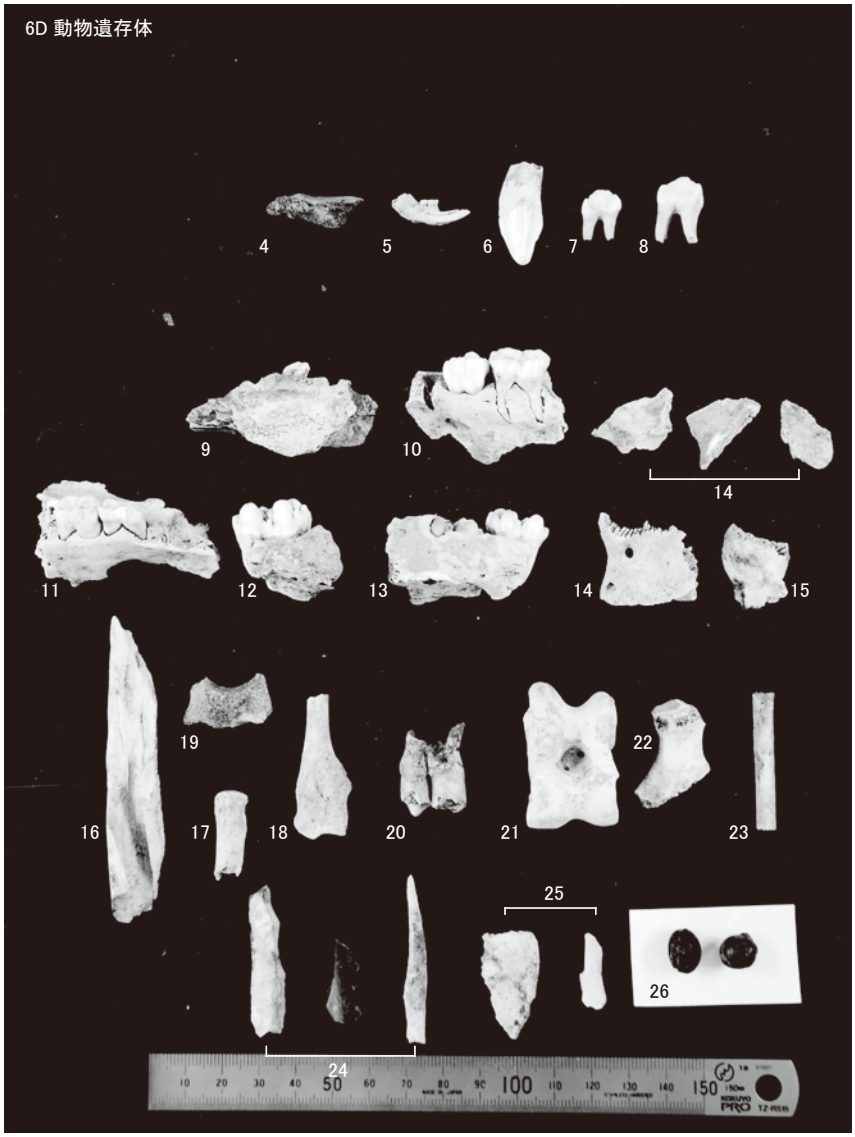
第 31 図　6B 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体



第 32 図　6C 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類

第 33 図　6C 区Ⅲ´層（貝層）出土の動植物遺存体

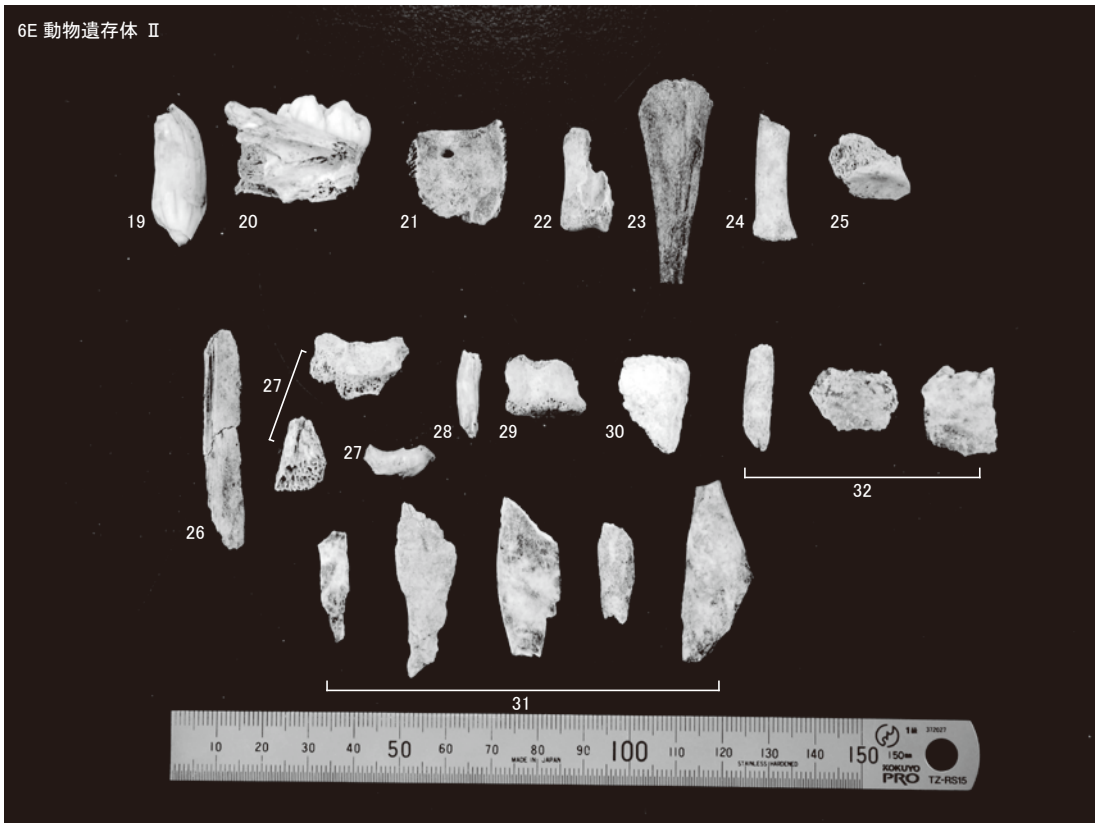
第 34 図　6D 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類



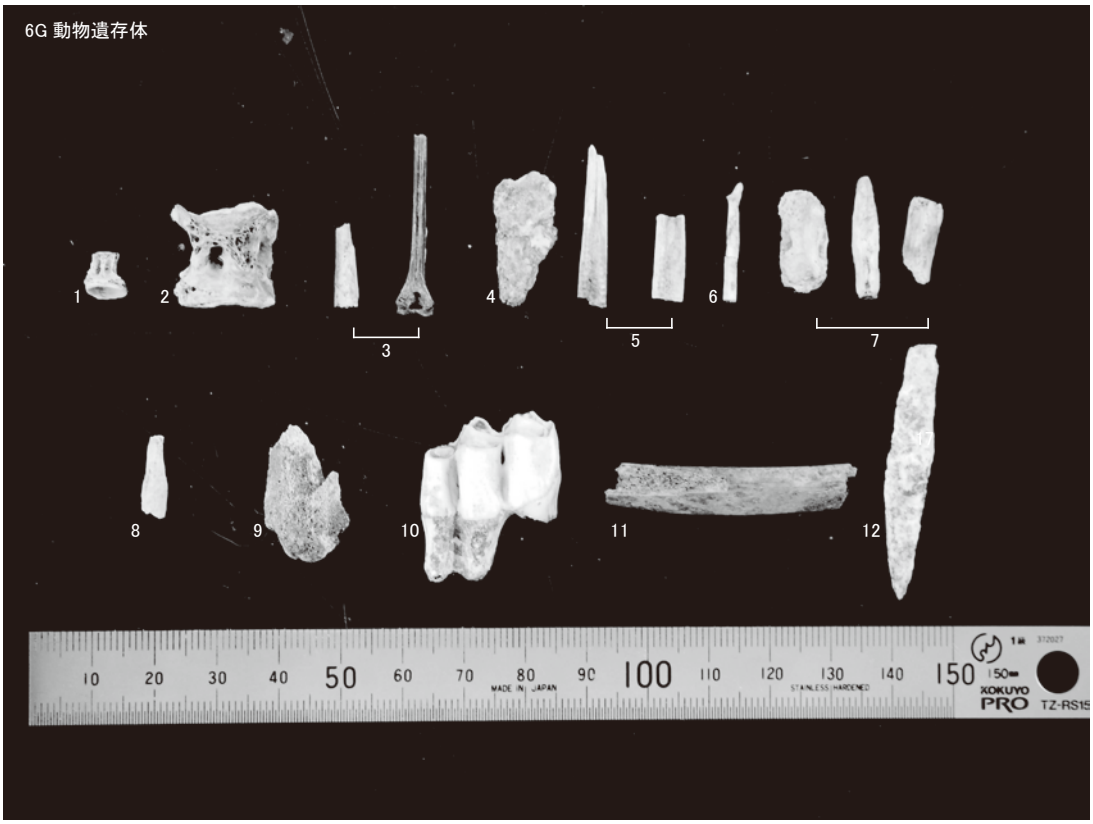
第 35 図　6D 区Ⅲ´層（貝層）出土の動植物遺存体

第 36 図　6E 区Ⅲ´層（貝層）出土の貝類

第 37 図　6E 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体①



第 38 図　6E 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体②



第 39 図　6G 区Ⅲ´層（貝層）出土の動物遺存体

参考文献

阿部永（1994）日本の哺乳類 ,東海大学出版会 ,195p.

奥谷喬司（2001）日本近海産貝類図鑑 ,東海大学出版会，1089p.

望月賢二（2005）魚と貝の事典 ,魚類文化研究会，497p.

第Ⅴ章　総括

第１節　貝類の組成について

第一分冊に報告のとおり６区から７区の北側において検出した貝層の貝類につて、第Ⅳ章の貝類同定結果に基づき、次の方法により貝類の組成を検討した。

検討対象として６Ａ区から６Ｇ区の資料を抽出し、個体の重複を避けるため、略完以上の残存率がある資料を集計した。マガキを除く二枚貝には殻頂部が残るものを対象とし、二枚貝は左右いずれか多い方の点数を組成比の基礎数値とした、サザエは蓋よりも本体の点数が多かったため、本体の点数を採用した。集計結果および組成比は第 12 表のとおりである。（図版 15 参照）

第 12 表　貝類の組成

			出土グリッド							小計（点）	組成比（%）
			6A	6B	6C	6D	6E	6F	6G		
種類（和名）	サザエ	本体	22	147	54	89	75	53	5	445	1.487
		蓋	31	65	30	38	51	36	4	255	－
	スガイ	－	230	1,826	1,028	3,639	2,280	969	262	10,234	34.187
	クマノコガイ	－	99	188	93	148	130	73	16	747	2.495
	コシダカガンガラ	－	191	995	655	1.304	1,097	584	118	4,944	16.516
	オオコシダガンガラ	－	183	784	293	475	560	270	56	2,621	8.756
	ウミニナ科	－	207	941	512	811	871	445	50	3,837	12.818
	レイシガイ	－	9	40	41	57	51	29	2	229	0.765
	テングニシ	－			1		1			2	0.007
	アカガイ	右								0	－
		左				1				1	0.003
	ヒメアカガイ	右	4	22	15	8		2		51	0.170
		左	3	16	18	9	4			50	－
	イタヤガイ	右		1		2	4	2		9	0.030
		左		1		0	4	1		6	－
	マガキ	右	113	834	807	1,714	1,029	628	238	5,363	17.915
		左	100	820	465	1,352	667	620	207	4,231	－
	オキシジミ	右	14	65	29	10	8	28	6	160	－
		左	26	59	21	10	15	24	8	163	0.545
	シジミ科	右	23	57	16	44	17	32	12	201	－
		左	21	57	14	37	24	42	18	213	0.712
	アサリ	右	1	13	11	19	41	7	11	103	0.344
		左		15	9	15	41	11	9	100	－
	ハマグリ	右		6		19	6	14		45	－
		左	1	3		25	3	20		52	0.174
	その他	－	19	166	71	297	249	94	25	921	3.077
	計	－	1,297	7,121	4,183	10,123	7,228	3,984	1,047	34,983	

個体数として最も多かったのはスガイであり約 34.2％を占める。次いで多いのが、マガキ（約 17.9％）、

コシダカガンガラ（約 16.5％）、ウミニナ科（約 12.8％）の順となっている。またオオコシダカガンガラも約 8.7％を占めているが、コシダカガンガラとは同系統の貝が大きさによって分類されているものであり、合算すると約 25.2％と全体の約 1 / 4 を占める高い比率となる。

以上の貝の組成比を合算すると全体の約 90.2％であり、これらが内野貝塚を形成した弥生時代の集落において採集、消費された貝類の圧倒的多数を占めていたと言えるだろう。残りの 1 割ほどが、ごく僅かな比率の多種の貝によって占められている状況である。

第２節　総括

今回調査は、市道拡幅に伴う限られた線的範囲での調査であり、遺構の検出はわずかであったが、包含層や貝層より島原半島南部における弥生時代の良好な資料が得られたことは重要な成果として挙げられる。出土土器の様相から、遺跡の年代は弥生時代後期が中心であるが、第一分冊に報告のとおり、７Ｃ区Ⅴ層より縄文時代晩期の浅鉢口縁、深鉢底部が単発的に出土している。周辺に縄文時代の遺跡があり、内野貝塚の形成時期に流れ込んできたものか詳細は不明だが、島原半島において特に南部地域は縄文時代晩期の遺跡の動向がよく判っておらず、周辺における調査の機会、蓄積に期待したい。

内野貝塚は現在の海岸線から直線で約 3km の距離があるが、平成 5 年に類似した様相の弥生土器が出土している永瀬貝塚の調査を行った寺田正剛によると、「加津佐中心地より堀川沿いに遡った内野周辺まで深い入り江または比較的大きな河川が入り込んでいた事が推察」されている（註１）。第Ⅳ章における自然科学分析の結果と合わせても、現在の加津佐町中心部を形成している小平野部はかつて当時内湾となっており、遺跡が所在する丘陵先端の眼下に近接していた岩礁帯や干潟における貝類の採集を生業の中心とし、漁労、狩猟、堅果などの採集を合わせながら集落の経営が行われていたと想定される。出土遺物を見る限り、農耕を示すようなものは今回の調査では認められなかった。

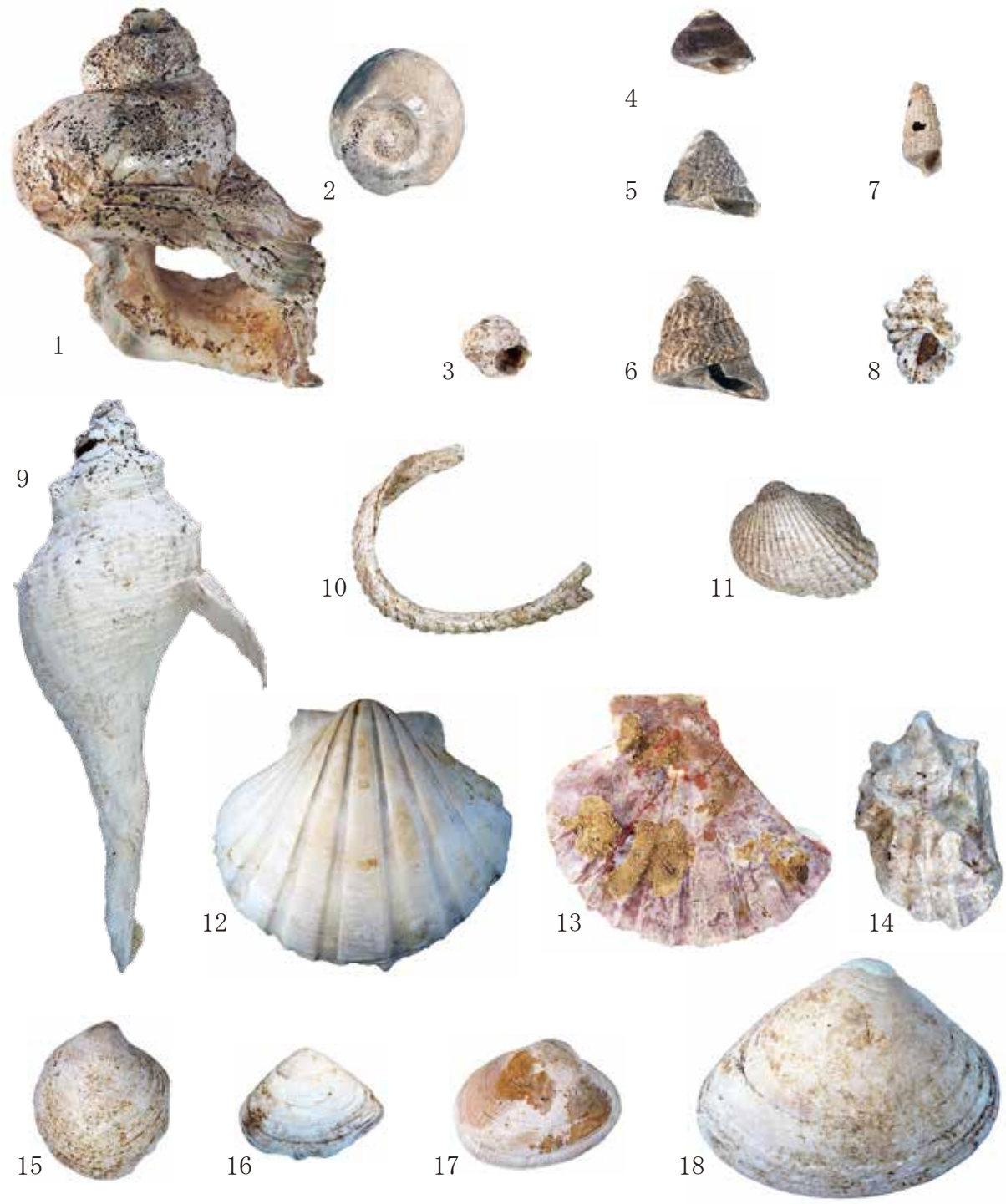
今回調査ではかなり纏まった量の良好な貝層の検出とともに、北部九州系や肥後系の特徴がある土器が出土しており、豊富に採集可能な貝類を集落内の消費のみではなく、交易品として利用していた可能性も想定しておきたい。前節の貝類の集計において着目されたのが、アカガイの点数が同定サンプルとして抽出した 1 点のみであり、かつ貝輪のような加工が認められる点である（第Ⅳ章・第 34 図参照）。同系で小型のヒメアカガイとは殻長 5 ㎝を目安に仕分けを行ったが、約 100 倍の差が出る結果となった。食用の身だけではなく、アカガイのように特定の貝については殻を装飾品の素材として選択し、加工流通させたことで、同系の貝類の間でこのように大きな比率の差が生じた可能性も推察される。今後調査の蓄積を待って検討を行えればと考えている。

上述の永瀬貝塚の報告においても貝層からのサンプル採取と組成の検討が行われているが、永瀬貝塚では淡水流入部に生息するハマグリが全体の約半数を占め、今回調査の内野貝塚で約 18％を占めるマガキは約 6％に留まるなど、かなり組成比の傾向が異なる。永瀬貝塚は内野貝塚の南東に位置し、かつての内湾の外にあるため、立地による貝類の生息分布の差が現れているものか。島原半島南部の口加地区では外にも辻貝塚、栴檀貝塚、三軒家貝塚など複数の貝塚が知られており、今後調査を蓄積し比較検討を進めることで、当時の環境の復元的考察が詳細に進められることを期待したい。

註１… 寺田正剛 編 1995「永瀬貝塚」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第 121 集　長崎県教育委員会

図　　版

図版15　内野貝塚の貝類



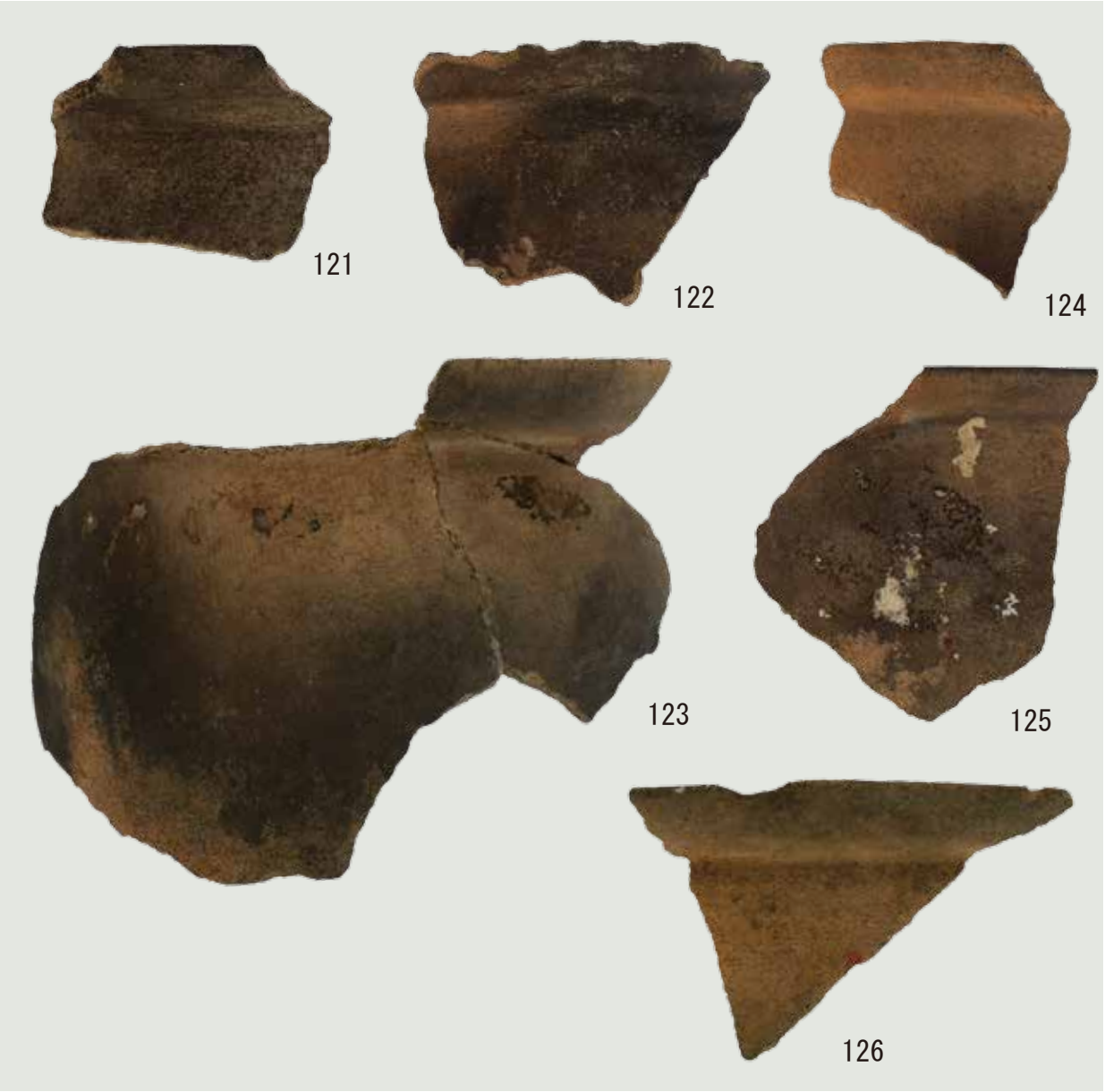
1 サザエ 6A
2 サザエ蓋 6A
3 スガイ 6D
4 クマノコガイ 6B
5 コシダカカンガラ 6A
6 オオコシダカカンガラ 6A
7 ウミニナ科 6B
8 レイシガイ 6C
9 テングニシ 6E
10 アカガイ 6D
11 ヒメアカガイ 6A
12 イタヤガイ 6E
13 イタヤガイ 6E
14 マガキ 6C
15 オキシジミ 6E
16 シジミ科 6A
17 アサリ 6D
18 ハマグリ 6B

図版16　内野貝塚の動物遺存体 I

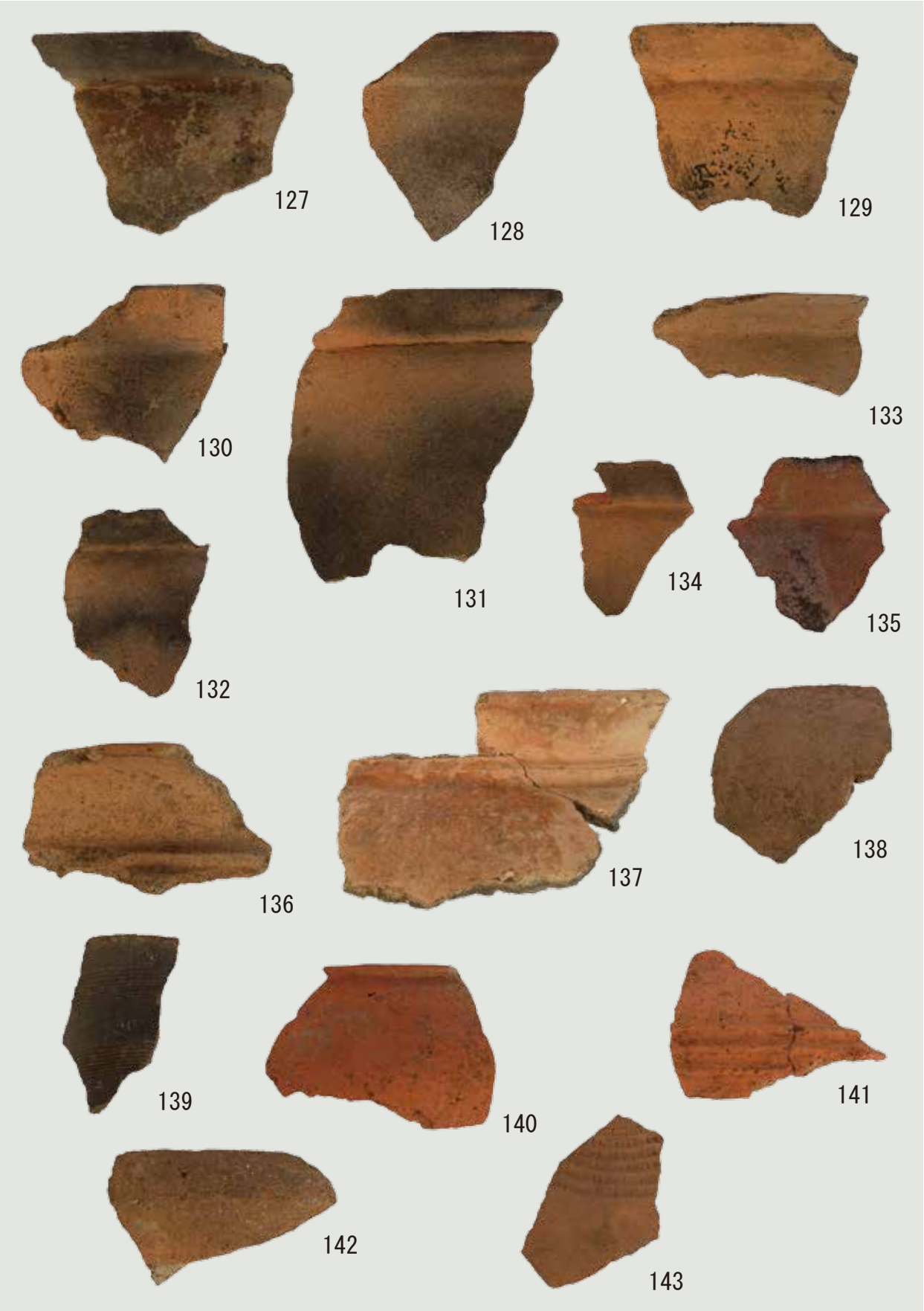
1 ネコザメ 遊離歯 6E
2 ハタ科？ 椎骨 6G
3 クロダイ属 前上顎骨 右 6E
4 マダイ 前上顎骨 右 6E
5 マダイ 主上顎骨 右 6E
6 タイ科 角舌骨 左 6E
7 タイ科 尾椎 6E
8 鳥類 四肢骨 6G
9 ネズミ科 下顎骨 右 6D
10 イノシシ 上顎犬歯 左 6D
11 イノシシ 上顎 M2orM3 右 6B
12 イノシシ 下顎切歯 6E
13 イノシシ 下顎 P2 左 6B
14 イノシシ 下顎 P3 左 6D
15 イノシシ 上顎片 右 6D
16 イノシシ 上顎片 右 6D
17 イノシシ 上顎片 左 6D
18 イノシシ 上顎片 左 6D
19 イノシシ 頭蓋骨 6D

20 イノシシ 上腕骨 左 6A
21 イノシシ 橈骨 左 6D
22 イノシシ 橈側手根骨 右 6C
23 イノシシ 第二中手骨 左 6D
24 イノシシ 腓骨 左 6E
25 イノシシ 腓骨 左 6D
26 イノシシ 中心足根骨 左 6D
27 イノシシ 第五中足骨 左 6E
28 イノシシ 中節骨 6E
29 イノシシ 中節骨 6A
30 ニホンジカ 鹿角 6B
31 ニホンジカ 上顎 M2orM3 右 6B
32 ニホンジカ 下顎 M3 右 6G
33 ニホンジカ 遊離歯 6B
34 ニホンジカ 遊離歯 6C
35 ニホンジカ 頸椎 6B
36 ニホンジカ 中間手根骨 左 6A
37 ニホンジカ 距骨 右 6D
38 ニホンジカ 大腿骨 右 6C
39 イノシシ / ニホンジカ 骨頭 6C
40 コナラ属炭化子葉 6D

図版 18



Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品①



Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品②

図版 20

Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品③

Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品④

図版 22

Ⅲ´層（貝層）出土土器・土製品③

報告書抄録

ふりがな	うちのかいづか（だいにぶんさつ）
書名	内野貝塚（第二分冊）
副書名	市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	伊藤 健司
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL0957-73-6705
発行年月日	西暦2023年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
うちのかいづか 内野貝塚	みなみしまばらし 南島原市 かづさちょう 加津佐町	42214	007	32° 38′ 26″	130° 10′ 44″	20191109 ～ 20200228	288㎡	市道改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内野貝塚	貝塚	弥生時代	貝層	弥生土器 貝類 獣骨 魚骨 種子	

南島原市文化財調査報告書　第 31 集

内 野 貝 塚（第二分冊）

2023.3.31

発行　長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙 1023 番地

印刷　(有) ナカミチ